



Title	[17]第二章 シベリア俘虜記・会報「雄叫び」
Author(s)	松山, 文生
Citation	満州ハイラル戦記, pp.149-160; 1994
Issue Date	1994-08-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/29535
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-25T09:58:34Z

第二章 シベリア俘虜記

会報「雄叫び」

昭和二十年十一月に入った頃から私達も移動するらしく、約一五〇〇名の梯団が編成され、私もその中に加えられた。軍医は三名同行するはずであったが、Y大尉が「発疹チフス」にかかったために、私一人だけの参加となってしまった。隊長はI少佐である。

十一月十六日朝から、浜州線に平行して設置してある二地区側の引つ込み線にソ連の貨物列車が数十両並べられ、それに私達は荷物を運びこんだ。貨車の一つが医務室用とされ、私は衛生下士官、兵数名と共にそれに乗りこんだ。その日は一日中荷物の運搬で約一五〇メートル離れている収容所と貨物列車との間を往復した。感心したのは貨物列車の直ぐ横で蒸気機関車の胴体くらいある鉄製の円筒を引つ張っているソ連の牽引車を見たときであった。円筒の下に転がり摩擦を少なくするための丸太も置かず引つ張っているのである。牽引車の正面は円筒の方を向いていたので、牽引車は後退しながら円筒を引く格好になる。牽引車は先ず前進のエンジンを掛けて円筒の方へ少し近づき、次にバックのエンジンを掛けて牽引車を後退させると共に円筒を引つ張るのである。丸太を入れていないので円筒はほんの少ししか動かない。一回に三、四十センチメートルしか移動しない。

一日中、根気よく飽きもせずをやっているのには辟易した。それでも夕方頃には結構三十メートルくらい動いていた。私は運転手の粘り強さにあきれた。私はソ連の国民性が少し理解出来たような気がした。鈍重で粘り強く物事を簡単に諦めない。日本人も真似をしなければならぬと思った。

敗戦後、各地区の停戦に回った旅団の高級将校の話では、トラックを運転しているソ連の兵隊にも同じような風潮がみられたそうだ。例えば、陣地への途中の道路に水溜りがあるとすると日本人なら当然回り道をして行くところを彼らは遠慮なく水溜りの中にトラックを突っ込むのだそうだ。二、三度試みて、どうしても駄目だと分かって、始めて回り道をするのだそうだ。頑固と言えば、頑固であるが、とにかく失敗だということが完全にわかるまで始めの考えを実行する所が素晴らしい。

私達はフスマで作った二日分くらいの食糧を持たされて貨物列車に乗せられた。午後六時以降は収容所との連絡は完全に断ち切られた。後は列車の出発を待つだけであった。

列車は夜のうちに静かにハイラルを離れた。ゴトン、ゴトンと軽く揺れる貨物列車の薄暗い灯りの中で、私はたまたま手に入れた早稲田大学の通信講義録の戦時捕虜の取り扱いのところをよんだ。ジュネーブ条約によると捕虜の将校は労働をしなくてもよいらしいが、果たしてソ連がその通り私達を取り扱ってくれるかどうかが疑問であった。翌日の朝、満州里に着いた。

余り人影は見えず、寒さむとした感じがした。満州人の子供から煙草の「前門」を買った。これが全くの羊頭狗肉の代物で表装は本物であったが中身は偽物であった。逞しい商魂をみた。

列車は北上を続ける。チタに着いたのは夜中の二時頃であった。深夜にも拘らず、水道栓の周りには大勢の市民が列を作って水を求めていた。日本の兵隊が行くと、優先的に列を開けて水を分けてくれるのである。ソ連政府が指導したのかも知れないが、巧く協力してくれたので助かった。然し、水が十分配給されなかつたために、目的地に着くまで食器洗いも出来ずに、洗っていない食器に次の食事を入れて食べるという、考えられないような生活を送った。

始めは便所も貨車に樽を一つ置いてあるのみであったが、将校が兵隊の前で排泄行為をするというのは汚券にかかわる。皆に頼んで筵むしろで囲いをして貰ってやつと安心して用が足せるようになった。ソ連の汽車は、日本の汽車のような連結器を持つていないので停車する時や発車する時は大変である。停車する時は遙か前方の機関車のあたりからガタンガタンという音が聞こえてくる。その時は覚悟を決めて二段ベッドの一段目をしっかり掴んでおかなければならない。自分の乗っている車両に衝撃があつた時に転ばないためである。発車の時も同様である。兎にかく柵に乗せてあるバケツが落ちてくる位の反動があつたことは確かであつた。

軍医というのは列車に乗っている時は割に合わない仕事だと思つた。列車が走っている時に

は、落ち着かないし、停車する時には、転ばないようにしつかり何かを掴んでいなければならぬし、停車すれば病人を診なければならぬという次第で良いことは一つもなかった。

一度、夜中に腹痛の患者が出て、五車両目くらいの前の車両に診察に行ったことがある。診察したところ虫垂炎の疑いがあるので、その旨、ソ連の輸送指揮官に報告したら、次の停車駅でソ連の医者が診察するのでそれまで様子を診ていろとの返事であった。痛がる兵隊に我慢するように言い聞かせたが、次の停車駅に着くまで大分かかった。深夜だというのにソ連の医者が待っていて診察してくれた。三十歳くらいの若い医者であった。「虫垂炎の疑いがあるがこの街では手術が出来ないので手術ができる街までそのまま列車に乗っていつてくれ」とのことであつた。

その時、彼は私に「何か鎮痛剤を使ったか」と聞いた。私が「使っていない」と答えると、「どうして使わなかったのか」と聞くので、「鎮痛剤を使うと、あなたが診察するときに症状がなくなつて誤診したら困るからである」と返事したら「お前は良い医者になるだろう」と褒めてくれて私は苦笑した。その患者は経過も良く、無事終着駅までもちこたえることが出来た。

バイカル湖を回るのに半日かかった。バイカル湖は「みずうみ」と言うより海と言う感じであつた。打ちよせる波の有り様を見ると日本の海そっくりである。琵琶湖などは比べものにならない。ソ連の国土の大きさを改めて思いしらされた。バイカル湖を離れて、列車は西進す

る。イルクーツクに着いた。黄色の絵の具を使って描かれた西洋画で見られる街のような感じがした。

列車は相変わらず西進を続ける。途中の駅でソ連の兵隊が一人、私達の医務室車に乗り込んできた。えらく陽気な兵隊である。上海で日支事変時、歩哨に立っている日本の兵隊を見た西洋人の子供が「日本の兵隊は、皆、淋しそうで、孤独で、無口であった」と言っているが、それと全く正反対にソ連の兵隊は呑気で明るい。

なお、二日間くらい列車は走って引き込み線に入って止まった。C市であった。私達はどうやらこの街に落ち着くらしい。立派な体格の日本軍の大尉が何人か部下を連れて来ている。私達は下車した。伍長の階級章を付けた日本兵がソ連兵と共にやって来て「軍医殿はおられませんか」と聞く。私が軍医だというと「ドイツ語はお出来になりますか」と尋ねる。私が「読むことは出来るが話すことは出来ない」と返事したら、日本の伍長君はソ連兵に「カンレーゼン、ニヒト シュプレッヘン (kann lesen, nicht sprechen)」と通訳しているのである。驚いたのは私である。助動詞と副詞を並べただけで名詞も接続詞もない。正直言つて、こんなドイツ語聞いたことも見たこともない。然し、これで結構意味が通じるところが語学の面白さであり、通訳の面白さがあるのである。この伍長君は東京のN大学の専門部の出身で物凄く語学の好きな人と聞いたがちょっと通訳としてはどうかかなあと私は思った。

列車から降りた私達は四列縦隊を作り、ソロソロとソ連兵の誘導するままに歩いた。沢山のソ連人が物珍しそうに私達を見ている。私の前を梅のマークを書いたりユックサクを背負った見慣れぬ中尉が歩いている。特務機関にいた将校ということであった。

この街は通勤電車の代わりに蒸気機関車が走っていた。暫らく歩いて、とある收容所に着いた。早速ソ連の看護婦が出てきて「ドクターはどこだ」と探している。一応私がそうだとおいておいた。私の顔を見て軍医がついてきたのに安心したのか、そのままどこかへ行ってしまった。

取りあえず私達は大きな講堂のようなところに入れられた。ソ連の将校が来たので誰かが「ここはどこか」と聞いたたら「バラックだ」と答えた。なるほど、バラック以外の何物でもない。聞く方が野暮というものである。また、誰かが「貴方はだれか」と聞いた。彼は「ナチャーリニツクだ（所長だ）」と答えて、講堂から出ていった。

私達は收容所の門を入れて直ぐのところにある広場に集められて、前からいる日本軍の隊長の訓辞を受けた。驚いたことに、この中佐の隊長は胸に金鷄勲章をつけているのである。廉むらある場合は付けることになっているとはいっても戦いに破れた私達は捕虜である。金鷄勲章は出来すぎではなからうか？と私は思った。この中佐が何を話したのかほとんど覚えていない。型通りの軍隊口調の挨拶の言葉を述べたようであった。

その点、I少佐の訓辞は身にしみた。「内地に帰る日が来るまで、身体を大切にしようにしてくれ。病気で一命を落としてもこんなところに来てくれないうことと考えて、無理をして身体を壊さないように」といわれた。本当に切々として身にしみる言葉であった。

私達将校は二、三日バラックの片隅の二階の八畳くらいの部屋で暮らした。その時、経理部見習士官の一人が雀をとりましようと言って、煉瓦を四角に並べその中にパン屑を入れ、その上に一枚の煉瓦を乗せその一端をマツチで支えた罌わなを作った。中の餌を取ろうとしてマツチ棒に触れ、煉瓦が落ち雀は簡単にとれた。随分餌に飢えていて、罌にたやすくかかる雀だと思っていたら、ソ連全土が食料不足だった。

この收容所をA收容所と名付けることとする。ここには例の日本軍の伍長のドイツ語の通訳と、そして別に一人ロシア語の通訳がいたが、ロシア語から日本語への翻訳が下手で、よく今まで、收容所の運営が出来てきたものだ、私達と同行して来た日本のT外国語学校を出たロシア語専門のAという姓の通訳が感心していた。炊事で物品を右から左に動かすように、ソ連兵から言われても、私達の通訳が黙って見ていると、前からいる通訳は、物品の名前も分からなければ方向も分からないという有様だったらしい。

A通訳の話では私達は入ソする時、一五〇〇人六ヶ月分の食糧を持って来たそうであるが、

各收容所がそれを分配して欲しいと揉めているということであつた。私達は食糧が不足どころか、私達に対する食糧絶無のところに流されてきたのである。これが悲劇の原因になるとは神ならぬ私達は知る由も無かつた。

私は軍医なのでやがて医務室勤務となり、医務室に申告に行つた。軍医大尉の人と衛生曹長がいると聞いたので、そのつもりで部屋に入り、申告しようとしたら、二人同じくらいの年齢の人がいる。どちらが上官か分からない。しかたがないので、二人の間の方を向いて申告したら人相の余り良くない方が○大尉であつた。○大尉はT医専の出身で良い人であつた。

○大尉は、*「いりこ」*が何よりも好きで、*「いりこ」*さえあれば他におかずは要らないといわれた。変わった人もいるものだ。○大尉とは暫く一緒に部屋でベッドを並べて暮らした。マツシロなシート、暖かい毛布にくるまって寝る時には捕虜の身であることを忘れた。收容所の四隅の望楼で自動小銃を抱えて立っているソ連の警備兵が可哀想であつた。

隊長の中佐は軍人精神で凝り固まっているような人で、隊長室にソ連兵が連絡に行つても姿勢が悪いと「姿勢が悪い」と言つてソ連兵を叱りつけるといふ話であつた。この部隊はソ連にくる時、謄写版を持ってきていた。機械そのものはソ連軍に直ぐ没収されたが、ヤスリ板とか鉄筆とかインクとか原紙とかは残されていたので、将兵から原稿を集めてガリ版を切つて「雄叫び」という会報を作つた。私も見たが、ありきたりの同人雑誌もどきのものであつた。

内容は色々であったが、中にソ連兵が自動小銃を手に持って物をねだっている漫画があり、「マンドリン片手にダワイ、ダワイ」と注がしてあり、私から見ると成るほどと頷かせるところがあった。これらの文や絵がソ連を侮辱すると言うことで、ソ連の刑法にひつかかり、投書した人、ガリ版をきつた人、編集者、皆処罰された。刑務所に送られるとのことであった。これを聞いた時ソ連とはつくづく怖い国だと思った。

ハイラル時代から医務室に勤務していて善行章を持っているひどく真面目な兵隊がいた。影ひなたなく働くので彼はソ連の看護婦からもひどく可愛がられていた。私は日本とかソ連とかいつて国情は変わっても真面目に働く人間が重宝されるのだなあと改めて感じさせられた。

その頃、この近くにあるB收容所で死亡者が沢山出ているという噂を聞いた。私は毎日O大尉の後ろにくつついて歩けばよいし、O大尉の命令のままに働いていけばよいので、ひどく気楽であった。